

自分事として捉え、実感を伴った理解を促す道徳授業づくり

新潟市立木崎小学校

教諭 佐々木 達弥 (平成26年度)

【主張】

学習指導要領『解説』では、「道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる」ことを目標とし、「道徳科が目指すものは、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことである」と明記されている。

しかし、教材を読んでどのように思ったかについて話し合う授業では、観念的に理解することに留まってしまう。授業において、教材と実生活を結び付けて考えさせることで、道徳的価値のよさや大切さについて実感を伴った理解をさせることが必要である。

そこで私は、教材等から自分の経験を想起し、比較・検討することを通して自分事として捉え、実感を伴った理解を促す道徳の授業を構想した。学級のみならず経験をすり合わせ、対話をくり返すことで、子どもは「そういう考えもあるのか」「これだったら自分もできそう」と思う。それにより実践意欲が高まり、実生活でもよりよく生きようとし、道徳性を養うことができる。

本実践では、手立てとして①ハートメーターの活用（自分の立場を明らかにする）②「自分だったらどう思うか（心情）」「自分ならどうするか（行動）」についての思考や検討。③振り返りの工夫の3点を挙げる。これにより、自分の経験を重ねながら、実感を伴った理解を促す道徳授業ができると考える。